

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 24 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531134

研究課題名(和文)「布のちから」の発見とイメージ表現活動を通して生活文化力を培う家庭科の開発研究

研究課題名(英文) Development the Study of Home Economics Education to Cultivate Life Culture through Discovery and Image Expression Activity of the Power of the Cloth

研究代表者

柴 静子 (Shiba, Shizuko)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：90141770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「布のちから」を発見し、「イメージ表現活動」を通して生活文化力を培うことを可能とする学習プログラムの開発を目的としたものであった。中学校段階では、藍染めの木綿布で絵本やそれを入れるバッグを製作し、モン族の保育園に贈ることを通して主題に迫った。高等学校段階では、「家庭基礎」において、明治期の輸出用実物衣装の観察と考察、及び絹物商の「ものづくりの精神」への理解という2つを取り入れた衣生活学習を開発し、実践・評価して、普及可能な学習モデルとして提案した。開発した学習プログラムは、「布のちから」の再発見と布を用いたイメージ表現活動とを連動させることに成功したことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this report was to develop the learning program of Home Economics Education to cultivate life culture through discovery and image expression activity of the power of the cloth. The experimental learning was practiced in Attached Shinonome Junior High School and Fukuyama Senior High School. At Shinonome Junior High School students were expected to produce cloth books and bags for Hmong children. The students in Fukuyama Senior High School rediscovered the power of cloth from a Kimonos across the sea and the Japanese spirit of the manufacturing in Meiji era. Students appreciated the developing program and understood a tradition and culture in Japanese clothes. We believed that the two programs would be the excellent learning models. We could spread them to high schools in Japan.

研究分野：教科教育学

 キーワード：学習プログラム開発 技術・家庭 家庭基礎 衣生活の伝統と文化 モン族 布の絵本 明治期の輸出
 キモノ ジャポニスム

1 . 研究開始当初の背景

衣生活の学習には、衣に関する科学を学び、科学的な思考方法を身につけて日常生活を合理的なものに改善することができる、針と糸と布を使ったものづくりの体験により、手指の巧緻性が高まるとともに、ものを創造することの楽しさを味わい、また忍耐の必要性を実感して、精神を豊かに育むことができる、日本の世界に誇るべき布や衣服・衣装の学習を通してこれらに対する敬意が芽生え、伝統文化を継承発展させようとする気持ちが生まれて、これが日本人としてのアイデンティティに結びつく、という教育的価値が備わっている。取りわけ に関しては、家庭科での学習を通して、生活環境が大きく変化する中で急速に失われつつある伝統的な衣生活文化を若い世代に伝え、振興する力となってもらいたいという思いから、小・中・高等学校の家庭科の内容に強く反映させるべきものとして重視している。

を同時に組み込んだ衣生活学習は可能であろうか。被服材料や染織に関する文献から、そしてこれまでに収集してきた実物裂から、苧麻・木綿・絹といった天然繊維で織られた布が人々の暮らしにいかにか大きな影響を与えてきたか、ということについて実感をもって理解できる。ゆえに、天然繊維と草木染めからなる布、とりわけ藍染の木綿および日本の近代化のための産業として大きな役割を果たした生糸・絹、そして 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて西洋のファッション革命を誘発したキモノの『ちから』について、若い世代に是非伝えたいと考えた。

衣生活の学習において、もう一つの重要な点は布を用いた製作の適切化を図るということである。一般的に行われている、教材会社から購入した布で暮らしに役立つものを製作する、という安直な学習ではなく、日本の伝統的な美しい、意味ある布を使用して、イメージ表現活動として『もの』を製作させる学習に方向転換することには深い意義があると考えた。

そして最後に重要なことは、日常的な生活の場において、容易には発見できない豊かな生活文化を発見し、それらを楽しみながら自己実現を図ることである。

以上の考えから、本申請のテーマである「『布のちから』の発見とイメージ表現活動を通して生活文化力を培う家庭科の開発研究」を設定した。

2 . 研究の目的

本研究では、日本の伝統と文化を直接的に感じることで「布」や「キモノ」を取り上げて、その『ちから』を発見させ、イメージ表現活動を通して生活文化力を培うことを主眼とした衣生活学習プログラムを開発し、効果を検証して普及を図り、生徒の成

長に資することを目的として設定した。具体的には、研究課題・目的・方法の明確化、キモノや布の実物を含めた資料収集と文献研究、プログラム一次案の作成、附属中・高等学校での授業実践、実践から得られた改善点の確認、プログラムの修正、修正プログラムに基づく授業実践と評価、授業のモデル化、モデル授業の普及という 9 段階を経ることによって、上記の目的にアプローチした。

3 . 研究の方法

(1)平成 24 年度(研究 1 年目)

本研究に必要な染織、服飾史、手芸、家庭科教育等の文献を購入し、精読した。家庭科の衣生活内容の問題点とそれらの解決に資する優れた先行研究をリサーチし、必要に応じて文献複写を依頼した。以上の作業に基づいて本研究の計画をさらに精緻化した。

日本の特徴ある自然布を入手した。京都服飾文化研究財団発行の図録「モードのジャポニスム展」等、授業で活用できる各種展覧会の図録、機関誌、その他の冊子類を購入した。

インターネットを利用して、授業で鑑賞させ、触れさせたい伝統を感じさせる着物や、小物作りの材料となる「洗い張り(着物を解き、反物の形に戻して洗濯をした古布)」などを購入した。

収集した文献、冊子、布の現物等、本研究において使用する資料を整理して、情報としていつでも利用できるようにした。

「布のちから」・「イメージ表現活動」・「生活文化力」についての考察を深め、この連動した三者を十分に機能させた中・高等学校の家庭科プログラムの構成について研究した。中学校「技術・家庭」においては、柿渋染と藍染の木綿布の文化をグローバルな視点から取り上げた学習プログラムの 1 次案、高等学校の「家庭基礎」においては、絹と刺繍が特徴的である輸出用キモノを中心とした 1 次案を作成した。また、リバティの布を用いたファッション・マグネット、モン族の刺繍布を用いたお手玉など、小物の試作品を作り、1 次案に適するかどうかについて検討した。

本研究に協力してプログラムを実践する中・高等学校を決定した。前者として広島大学附属東雲中学校、後者として同附属福山高校の家庭科教師に 1 次案に基づく授業実践を依頼した。

「布のちからの発見」と「イメージ表現活動」を組み合わせた家庭科学習の具体的な内容と方法および評価について、中・高等学校段階別に明確にし、指導過程を構想した。

中学校段階では木綿と麻に焦点を当てた。藍染緋(例えば広島県地方では備後緋)、インドの独立運動を促したカディ(ガンジーも紡いだ手織木綿)、インドネシアの更紗などを使用し、身の回りから途上国へとグローバルに「布のちから」を発見する学習を構想し

た。まず、「日本人は何を着てきたか」というテーマのもとで、布と日本人の関わりを通史的に捉えさせることを考えた。日本人の衣服の変遷について調べさせ、とりわけ戦後の「和服」から「洋装」という転換が大きかったことを発見させること、またこれとは対比的に、伝統的な民族衣裳を未だ自給自足しているモン族について、映像を視聴させるのみならず、麻の藍染布と精緻なクロスステッチ布から構成された巻スカートなどの実物を提示して、この人たちにとっての「布のちから」について考えさせることに力点を置いた。イメージ表現活動としては、藍染と柿渋染木綿の弁当風呂敷を製作させることにした。

高等学校「家庭基礎」においては、被服材料、被服整理、着装、被服の消費などを組み込んだ、服飾文化史を柱とした学習を構想した。精巧な染織や日本刺繍の技巧をこらして美しさを追求した、幕末、明治・大正期の着物に触れさせ、「絹のちから」を実感させることを通して、かつてシルクカントリー・ジャパンといわれ、西洋があこがれた染織の日本を再発見し、日本人としての誇りをもたせたいと考えた。このためファッション・モードのジャポニズムを取り上げて、ウォルト、ポワレ、ヴィオネらがいかにか日本のきものや絹の布から新しい服飾デザインのインスピレーションを得たかを発見させることとした。

協力教師に以上のような指導の方向性を示して、本学附属東雲中学校の「技術・家庭」および福山高等学校の「家庭基礎」の衣生活学習として実験授業を実施した。授業前後にアンケート調査を行い、感想を書かせた。一連の授業はすべてビデオで撮影し、分析した。

(2)平成 25 年度(研究 2 年目)

ビデオに収録した平成 24 年度の授業をストップモーション方式で分析した。生徒の学習前後の変化について、アンケートや観察で明らかにして当該授業の効果と改善点を抽出した。

授業の録画や諸資料をもとに、実験授業を多面的に検討し、「『布のちから』の発見とイメージ表現活動を通して生活文化力を培う家庭科プログラム」の 2 次案を作成した。

日本教科教育学会でこれまでの研究成果を発表した。(11 月: 於岡山大学教育学部)

附属東雲中学校の「技術・家庭」および福山高等学校の「家庭基礎」において、2 次案に基づいた授業を実施した。授業前後にアンケート調査を行い、感想を書かせた。一連の授業はすべてビデオで撮影し、分析した。

上記の授業実践を高度化するために、20 世紀初頭における西欧のファッションの変化と日本の着物が果たした役割について、文献研究と収集した実物衣裳を通して考察を加えた。

(3)平成 26 年度(研究 3 年目)

ビデオに収録した平成 25 年度の授業をストップモーション方式で分析した。生徒の学

習前後の変化について、アンケートや観察で明らかにして当該授業の効果と改善点を抽出した。

授業の録画や諸資料をもとに、実験授業を多面的に検討し、「『布のちから』の発見とイメージ表現活動を通して生活文化力を培う家庭科プログラム」の 3 次案を作成した。

日本家庭科教育学会でこれまでの研究成果を発表した。(6 月: 於岡山大学教育学部)

広島県の高等学校家庭科教師を対象としたアンケートを実施し、前年度に開発した「家庭基礎」用学習プログラムが受容されるかどうかを調査した。

附属東雲中学校の「技術・家庭」および福山高等学校の「家庭基礎」において、3 次案に基づいた授業を実施した。授業前後にアンケート調査を行い、感想を書かせた。一連の授業はすべてビデオで撮影し、ストップモーション方式で分析した。

上記の授業実践に寄与するために、明治期に欧米に向けて輸出された日本刺繍が施されたキモノ風室内着、イヴニング・コート、ドレッシング・ガウンを収集し、服飾文化史の観点から考察を加えた。「日本人は何を着てきたか」を主題とした実物教材を開発した。

3 年間にわたる研究の総括を行い、開発された学習プログラムの普及を意図した活動を行った。例えば家庭科教師を対象とした教員免許状更新講習において、本研究に基づいて、日本の衣生活の伝統と文化を取り上げた。

4. 研究成果

(1)平成 24・25 年度の授業研究の成果

平成 24 年度の授業研究の成果は、広島大学附属東雲中学校の研究紀要及び広島大学学部・附属学校共同研究紀要に掲載した論文(本稿「5. 主な発表論文等」に記載した 8 と 9)が示すとおりである。

前者の論稿は、木綿布を柿渋で染めて弁当袋を作る授業実践を行い、検討したものである。後者はファッション・モードのジャポニズムと日本の着物の影響についての授業を實踐史、検討したものである。アンケート調査等から、いずれにおいても高い授業効果があったことが明らかになった。

平成 24 年度の実践研究から、附属東雲中学校の「技術・家庭」の場合は、生活文化力を培うことに確かに繋がるプログラムの開発が課題となった。そこで平成 25 年度は、インジゴ染のジーンズ生地と柿渋染の木綿生地で作成の「ぬりえ絵本」を入れるバッグをつくり、途上国の子どもたちへ贈ることを通して、生活文化力を培う授業を計画し、実施した。

また附属福山高等学校の「家庭基礎」の場合は、平成 24 年度の実践研究から、モードのジャポニズムを引き起こした実物衣裳を観察・考察させることにより、実際にジャポニズムがあったことを確認させる方向に授

業を改善する必要性が出てきた。そこで、明治期に西欧に輸出され、人々を熱狂させた、刺繍のついた絹のキモノ風室内着やドレス・ガウンなどの実物衣装を収集し、観察と考察をとおしてもものづくりの秀逸さに気づかせる、というレベルアップした授業を構想し、実践した。明治の近代化に際して外貨獲得と文化の発信という両面で貢献した輸出用キモノ(ドレス・ガウン、キモノ風室内着、イブニング・コート)の観察は、生徒の関心を高めるとともに、ものづくりの精神のあり方についての理解を深めた。授業に際しては、輸出用の生糸の梱に付けた商標の開発や映像収集などを行い、豊富な学習環境を作った。授業前後に実施した調査の結果から、多くの生徒が明治期の輸出キモノに関心をもち、特に刺繍に興味を示して、学習後にはキモノが好きだ、民族衣装としてのキモノを誇らしく思うといった生徒が増えたこと、生糸のみならず絹製品が近代化に貢献したことなど、歴史を深く理解したことが明らかになった。

以上の中・高等学校における平成 25 年度の実践研究の成果は、広島大学附属東雲中学校の研究紀要及び広島大学学部・附属学校共同研究紀要等に掲載した論文(本稿「5. 主な発表論文等」)に記載した4, 5, 6)に示したとおりである。

平成 24・25 年度の研究成果をまとめて述べると、各種アンケートや授業観察記録の考察を通して、平成 24 年度に開発された学習プログラムの1次案、そして改善された2次案による平成 25 年度の実践によって、中、高校生の日本の染織文化に対する興味・関心は高まり、布のちからに関する理解が進んだ、ということである。

(2) 平成 26 年度の授業研究の成果

平成 26 年度の授業研究の成果は、広島大学附属東雲中学校の研究紀要及び広島大学学部・附属学校共同研究紀要等に掲載した論文(本稿「5. 主な発表論文等」)に記載した1と2)が示しているとおりである。

附属東雲中学校の実践研究では、日本の衣生活の伝統・文化の内容とESD(持続可能な開発のための教育)とを関連づけて学ばせることができないうか、という課題意識のもと、生徒の表現活動となる『ものづくり』と『発展途上国理解』とを繋いだ学習を構築した。すなわち、文化環境に恵まれていないアジアの高地に住む「針と糸の民」と呼ばれているモン族の子どもに贈る布絵本を製作することを目標にすることで、関わりを尊重する個人の育成につながり、さらには持続可能な開発のための人材(グローバルな人材)の育成につながると考えた。

モン族の民族衣装は、麻でできており、藍によるろうけつ染めと緻密なクロスステッチによる刺繍が特徴的である。生徒は、日本の藍染めの伝統を継承しているカイハラ

の布絵本を使い、モン族の保育園児たちに贈る布絵本とバッグを製作した。バッグに入れた布絵本は、現地住民を支援しているシャンティ・ボランティア会に依頼してタイのホイドウア保育園に届けてもらった。この保育園での絵本の読み聞かせの画面を撮影してもらい、製作者である生徒に視聴させた。このような学習過程を経て、生徒は日本とモン族との布の文化の共通点を見出すとともに、途上国理解を深めることになった。日本の伝統と途上国理解を結ぶ「布のちから」を実感させることのできる学習プログラム(3次案)が開発されたといえる。

平成 26 年度、附属福山高等学校の「家庭基礎」では、前年度に開発した「海を渡ったキモノから染織の日本を再発見する衣生活学習」(2次案)の効果をアンケートや映像分析などを通して検討し、それを踏まえて本年度に取り組む改善プログラムの枠組みを次のように構想した。着物に関する歴史を知り、これのもつ平面構成、絹地に日本刺繍が多く使用されてきたことの意味を理解する。古今の被服の材料と特性について知る。

ファッションのジャポニズムと着物の「ちから」について理解する。日本の幕末・明治の着物が西欧を魅了したことをエビデンスに基づいて理解する。ドレス・ガウンを通して、横浜の椎野正兵衛のものづくりの精神を知る。京都の飯田高島屋(飯田新七)と千總(西村總左衛門)の活動(京都の復興と欧米向け輸出キモノの考案)を知る。

実物衣装を手にとってよく調べる。(椎野商店、高島屋、千總の実物衣装:ドレス・ガウン、イブニング・コート、キモノ風室内着)。「モードのジャポニズムの図録」を使用して謎の衣装の解明を図るとともに、刺繍の技法、衣装の構成、布地などを観察する。幕末の刺繍打掛や小袖と比較して、継承発展しているものは何かを発見する。実物衣装に使用されている絹布の観察と厚みを測定する。明治時代の絹地と現代の絹地の厚みを比較し、前者ではより薄い絹が織られていたことに気づく。絹織物の伝統を福島県川俣町で引き継ぎ発展させている「齋栄織物」のものづくりに焦点を当てる。絹文化を継承し発展させるためには日本人は何をすればよいのかについてグローバルな視点から考える。そして足下から行動するにはどうすればよいのか、考えを交流する。明治期の「ものづくりの精神」を継承発展させて、様々な布で絵本を含む各種の遊び用具を作り、「ももやま保育園」での幼児とのふれあい体験で使用する。

以上の改善プログラム(3次案)を実践したところ、計測器を使用した布の厚み測定によって明治期に輸出された刺繍キモノに対する観察がより緻密になった、「ものづくりの精神」を保育園訪問時のプレゼントの製作に生かし、従来よりも優れた製作を行うことができた、時空を超えた「キモノのちから」

を実感し、衣装文化を継承発展させる気持ちが醸成された、という高い学習成果を得ることができた。

(3) 実物衣装の収集と明治期の輸出用キモノのもつ価値の発見

平成 25・26 年度は、特に「家庭基礎」を対象とした衣生活の伝統・文化に関する学習プログラムの開発を支援する研究に力点を置いた。そのために、明治期の輸出用キモノの実物を欧米から収集し、服飾文化史の視点から考察を加えた。

明治の染織の秀逸性を欧米に認めさせた輸出用の衣装については、その代表的なものが図録『モードのジャポニスム 東京展』(1996)に掲載されている。これは、京都服飾文化研究財団が東京で開催した同展覧会に際して発行したものであり、同研究所が収集・所蔵している明治期の輸出用室内着やドレス・ガウンが「写真」と説明の形で取り上げられている。また、飯田高島屋が1911(明治44)年12月に発行した貿易カタログ「Novelties in Japanese Articles」にも、当時、同呉服店が取り扱った輸出用衣装として、写真入りで掲載されている。それらを見ただけでも、当時の日本からこのように洗練された衣装が欧米に輸出されていたことに驚くが、類似した衣装は百年を超えた現在でも欧米のアンティーク市場に出されることがある。

「家庭基礎」における『染織日本のちから』の学習を支援する教材として、これまでに欧米から入手した輸出用の室内着やコート類は、次の3つのパターンに分けることができる。1つは、椎野正兵衛商店が幕末から明治初期に製作して輸出していた、草花や稲の模様の刺繍が施されたドレス・ガウンおよびキルティング(刺し子)が特徴であるドレス・ガウンである。2つめは明治中期に飯田高島屋や千總などが製作し、輸出していたイヴニング・コート(マンダリン・コート)である。3つめは同じく飯田高島屋や千總が明治中・後期に輸出したキモノ風室内着もしくはそれに類似したものである。

実物を観察すると、これらの衣装の大多数は、絹の表地、中綿、絹の裏地という3層になっており、表地には絹の撚糸を用いて日本的なモチーフの刺繍が施されている。裏地にはごく薄い絹が使用されているため、表地は殆ど劣化していないのに裏地が相当破損されているものや、破損された裏地をとってしまっただけのやや厚手の絹地をつけたものもある。刺繍については、日本刺繍の特徴である肉入繡の技法が多用され、絹地に立体感を与えている。モチーフ、刺繍部分の面積とボリューム、手わざの巧緻度等については、各衣装で差が見られる。

明治期のキモノ風室内着は、日本の近代化を支える外貨獲得と文化発信という2つの期待を背負って、良質のシルク地に日本美を表

現した刺繍を施されて欧米に雄飛した。伝統的な着物の構成をベースとしていたが、当時、欧米で流行していた腰がふくらんだドレスの上から着用できるように台形の襠が入られた。おそらく羽織の構成から得た知恵であろう。今回の研究で、19世紀後半から1920年代末頃まで、欧米でのジャポニスムと歩調を合わせながら、キモノ風室内着は海を渡って日本の染織の秀逸性を具体的に示したことが明らかになった。この知見に基づいて、日本の衣生活の伝統と文化を発見させる授業が構築された場合、大きな学習効果を上げることが可能になることが実証された。

(4) 「布のちから」と「イメージ表現活動」を組み込んだ学習プログラムの提案

本研究の成果に基づいて、ここでは「家庭基礎」に関する「布のちからとイメージ表現」の学習プログラムを次のように提案する。

着物に関する歴史を知り、これのもつ平面構成、絹地に日本刺繍が多く使用されてきたことの意味を理解する。古今の被服の材料と特性について知る(1時間) ファッションのジャポニスムと着物の「ちから」について理解する。(1時間) 日本の幕末・明治の着物が西欧を魅了したことをエビデンス(輸出量)に基づいて理解する。(0.5時間)

ドレス・ガウンを通して横浜の椎野正兵衛のものづくりの精神を知る。(0.5時間) 京都の飯田高島屋(飯田新七)と千總(西村總左衛門)の活動(京都の復興と欧米向け輸出キモノの考案)を知る。(0.5時間)

実物衣装をよく調べる。(椎野商店、飯田高島屋、千總の実物衣装 - ドレス・ガウン、イヴニング・コート、キモノ風室内着 - 「モードのジャポニスムの図録」を使用して未知の衣装の解明を図るとともに、刺繍の技法、衣装の構成、布地などを観察する。幕末の刺繍打掛や小袖と比較して、継承発展しているものは何かを発見する)。(1時間) 実物衣装に使用されている絹布の観察と厚みの測定(明治の絹の厚みを測定し、薄い絹が織られていたことに気づく)。(0.5時間)

絹織物の伝統の継承(絹織物の伝統を川俣で引き継ぎ発展させている「齋栄織物」に焦点を当てる)。(0.5時間) 絹文化を継承し発展させるためには日本人は何をすればよいのかについてグローバルな視点から考える。そして足元から行動するにはどうすればよいのか、考えを交流する。(0.5時間) 明治の絹物商の「ものづくりの精神」を継承して、他者が喜んでくれるユニークな布製品を一念に、美しく作りあげる。(2時間)

以上のように8時間を配分することができれば、『明治期の輸出用キモノ』という切り口から、「布・キモノのちから」の発見と「イメージ表現活動」とを統合した、衣生活の伝統と文化に関する独自性のある学習を展開することが可能になる。

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 9 件)

1. 高橋 美与子, 柴 静子, 日浦 美智代, 一ノ瀬 孝恵, 木下瑞穂, 高田 宏, 「欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 43 号, 査読無, 2015, pp.289-298.
2. 浦上千歳, 柴 静子, 「子どもたちに贈る布絵本の製作を通してグローバルな資質の育成をめざす「技術・家庭」の授業開発」, 『中学教育』第 46 集, 査読無, 2015, pp.79-86.
3. 柴 静子, 「日本染織文化の再発見と継承をねらいとした被服学習を支援する内外資料収集と教材開発」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第 63 号, pp.297-306, 2014, 査読無.
4. 柴 静子, 高橋美与子, 日浦美智代, 一ノ瀬孝恵, 「明治期に欧米に渡ったキモノを通して『染織の技』と『ものづくりの精神』を発見する衣生活学習の開発」『生活実践力を育成する家庭科の授業開発(日本家庭科教育学会共同研究報告書)』, 査読無, 2014, pp.103-110.
5. 高橋 美与子, 柴 静子, 日浦 美智代, 一ノ瀬 孝恵, 高田 宏, 佐藤敦子, 「海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する衣生活学習の開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 42 号, 査読無, 2014, pp.29-38.
6. 浦上千歳, 柴 静子, 「生活文化力を培う家庭科の授業づくり(2) - モン族の子どもたちに贈るジャパン・ブルーの絵本バッグの製作を通して - 」, 『中学教育』第 45 集, 査読無, 2014, pp.89-95.
7. 柴 静子, 「『染織の日本』の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第 62 号, pp.311-320, 2013, 査読無.
8. 浦上千歳, 柴 静子, 「生活文化力を培う家庭科の授業づくり - 伝統・文化の視点を取り入れた授業を通して - 」『中学教育』第 44 集, 査読無, pp.87-93, 2013.
9. 高橋美与子, 柴 静子, 日浦 美智代, 一ノ瀬 孝恵, 高田 宏, 「モードのジャポニズムを通して日本の布と着物のちからを発見する衣生活領域の授業開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 41 号, 査読無, 2013, pp.11-21.

【学会発表】(計 4 件)

1. 柴静子, 「染織日本の伝統と文化を学ぶ教材としての明治・大正期の輸出キモノについて」, 日本家庭科教育学会第 57 回大会, 2014 年 6 月 28 - 29 日, 岡山大学教育学部.
2. 柴静子, 日浦美智代, 一ノ瀬孝恵, 高橋美与子, 「ものづくりの精神を伝える家庭基礎衣生活分野の授業 染織の日本の技を生か

した海を渡ったキモノから」, 日本家庭科教育学会第 57 回大会, 2014 年 6 月 28 - 29 日, 岡山大学教育学部.

3. 浦上千歳, 増田恭子, 柴静子, 「生活文化力を培う家庭科授業の創造」, 日本家庭科教育学会第 57 回大会, 2014 年 6 月 28 - 29 日, 岡山大学教育学部.

4. 柴静子, 「『染織の日本』の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集」, 日本教科教育学会第 39 回大会, 2013 年 11 月 23 - 24 日, 岡山大学教育学部.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴 静子 (SHIBA, Shizuko)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 90141770